

蝶の博物詩

生態40

迷蝶



キタテハ
新北風に乗って北方より飛来(2004年11月2日 西表島)

photo by

Nishiyama



キミスジ
(2010年3月11日 石垣島)

蝶の博物詩

生態40

迷蝶

地球温暖化の影響で、私が昆虫少年であった昭和の初期に、図譜でしかみられなかった南方系の蝶を、家の庭で観察できるようになった。ナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモン、ムラサキツバメがよい例で、生活圏を連続性に北方に拡げている。

白水 隆著『日本産蝶類標準図鑑』には、“その地域に住みついていない蝶が、ほかの地域からやって来る場合に、それを迷蝶(または偶産種)という”と広く定義されている。しかし実際には隣接地からの連続性の進入よりは、大陸や東南アジアの島々から海を渡って移動して来るほうが魅力的らしい。珍しいだけではなく、その出発地点を推察するという楽しみもあり、ボロボロの迷蝶も蒐集している蝶屋も少なくない。

10年もほど前に石垣島の山中で、雌のナガサキアゲハ(本誌19巻6号)を目撃したことがある。写真は撮れなかったが、島在住の蝶屋の友人に話したところ、情報がSNSで広まり、翌日の午前中に迷蝶採集家が見事に捕獲したと聞いた。その人は帰京の航空便をいくつか逃して探したそうである。ナガサキアゲハは近くの沖縄本島にはたくさんいるが、石垣島では迷蝶扱いで、価値があるらしい。同じように奄美大島、沖縄本島や台湾、中国南部では普通のモンキアゲハ(本誌26巻5号)も八重山諸島には土着していない迷蝶である。

一般に、日本とくに八重山諸島に来る迷蝶はフィリピン、台湾、中国南部から南西季節風に乗ってくるマダラチョウ科の蝶が多い。リュウキュウムラサキ、ヤエヤマムラサキ、マルバネリマダラなどが有名で、8月以後には次世代の幼虫が発生し、多少の栄枯盛衰があっても毎年新しく美しい蝶がみられる。

八重山諸島での迷蝶の変動はめまぐるしく、写真のキミスジは2005年に西表島に迷入し、2009年には石垣島に多数の美しい個体を撮影できた。2006年には幼虫がソテツを食べるクロマダラソテツシジミという小さなシジミチョウが石垣島に現れ、間もなく本州にまで到達したのは記憶に新しい。

逆に、本州から八重山諸島に飛来する迷蝶は、夏の終わりごろに吹く新北風(ミーニシ)に乗って来ると思われる。写真のキタテハは本州の暖地に広く分布する駄蝶で、八重山諸島で見られるものは北からの流れものと思われる。沖縄にはキタテハの食草であるカナムグラがないので迷蝶といわれる。

蝶の移動の方法は長距離を自力で飛翔するものから風まかせのものまでさまざま、中にはヒトによる偶発的な運搬や意図のないいわゆる放蝶がある。奄美大島にしかないはずのアカボシゴマダラ(本誌31巻8、9号)が20年前に鎌倉に現れ、庭のエノキに産卵、多数の幼虫が発生したのには驚いた。よくみると国産のアカボシゴマダラとは風格が違い、すぐに偽者とわかった。すなわち朝鮮半島、中国に分布する名義タイプ亜種であり、自然の迷蝶ではなく、人為的な放蝶であった。最近、この移民を排除すべく、幼虫の飼育が禁止された。その善し悪しは議論のあるところであろう。

西山茂夫